『比較民俗研究』11. 1995／3

ナシ族民俗調査中間報告

飯島　吉晴※

1．ナシ族の神

・ナシ族の神と外来の神とは，言葉で意味がわかるかどうかで区別できる。漢族の最高神のようなものはない。神のほかに，半神半動物や災厄をもたらす鬼がいる。

・神には2400種類あり，18種類のトンパの儀礼毎に神の系統がある。

・病気の原因には，大自然の環境汚染，肉体の衰弱，社会倫理の侵犯，驚愕して魂を失うことなどがある。病気を治す人には，サニ（巫女）とトンパ（東巴）がいる。サニは主に鬼を追放することで治療し，トンパは経典をみながら儀礼を行って治す。魂を失って病気になった場合には「風祭」を行う。病気の名前を表す象形文字もあり，地方によって異なることもある。トンパはナシ族の民間宗教者でトンパ文字という独特の象形文字で記した経典を使用し，病気治療や卜占のほか冠婚葬祭に伴う諸儀礼を執行する。トンパは，トンパ経典のほか，祭具，装束，舞踊などにも特色があり，儀礼毎にさまざまな作り物や祭壇を作る。

・ナシ族の祖先とトンパの祖であるトンパシローとは異なる。トンパシローには今までの系譜がある。トンパシローが生まれた時，鬼が驚いて鍋に入れて煮た。5日ほど立って鍋をあけてみると，トンパシローは平気で現れた。トンパシローにはトンパの祖というだけでなく，チベット族のボン教の祖という意味もある。

2．ナシ族の民家

・正房をジンメと呼ぶが，これは「母の家」を意味する。日本語の母家（オモヤ）に相当すると思われる。現在は漢族の民家と共通する家が多いが，山地の村には伝統的な木造家屋である木楞房も少数残っている。屋根は板葺が一般的でレイスギ，ウンナンマツなど杉や松の板を使用しているが，谷沿いの米のできる村では瓦屋根もみられる。屋根の切妻にはスズマとよぶ板飾りが必ず付けられており，魚や大極図をはじめおめでたい宝物が3～5個連続したものが多い。魚形が多いことから，火事除けの意味もあるようである。

・家屋を新築した場合，庭の入口で，鬼を追払って善いものは入れ悪いものは追い出す儀礼をまず行う。トラとヤクを門の神として祭ることもある。

・イロリのある部屋をホロコと呼ぶ。イロリはツォといい，東北隅に設けられる。イロリは一段高い床に五徳を置いたものだが，男女や年齢によって座席が決められ，男座をゲツォ，女座をミツォといって座席や座順が厳しく守られていた。現在は寝室にベッド（寝台）を置い

※天理大学文学部助教授

て寝ているが，かつてはイロリのそばに寝たという。イロリも木造家屋と同様に見られなくなっているが，年寄はイロリのそばを恋しがっている。太安郷汝寒坪村では，イロリの部屋の東北隅に大切なものを入れておく箱（グー）が置いてあり，女座の上には神棚が設けられている。イロリの３つ石や五徳は動かしてはいけないという。

・イロリの火。火を普段消してはいけない。分家するときは，年寄を頼んでイロリの火を移してもらう。また兄弟の場合，兄の家の方を高くするという。炉には，薪の太い方を先にして火にいれる。床上炉になっているのは，入口で神に頭をさげるためだという。太安郷汝寒坪村の民家の入口も低く作られ竹で編んだカーテンでふさがれているが，やはり木氏に頭を下げるためだという。

・イロリのそばの太い主柱をギメムトゥジャと呼ぶ。ギメは部屋や建物，部屋の中心にあるの意味で，ムトゥは天井を支える，スジャは柱のことで，全体で建物の天井を支える中心にある柱となり，日本の大黒柱に相当する大切な柱である。ギメムトゥジャに隣接する小さな柱はミトゥジャと呼び，火をつけるための柱の意味がある。

・ギメムトゥジャには，祭天に使う祭具を入れた竹籠を吊したり，収穫した初穂を結びつけたりする。またトンパの名前を貰う時にも，この柱に２本の太い柏樹を結びつけて儀式を行うが，費用や日数のかかる珍しい儀礼であった。竹籠は，祭天の時に女性が米などを入れて担いで行く。祭天で使った柏樹の枝は竹籠に入れて保存し，雷や大雨の際に防災の呪いとして燃やす。ギメムトゥジャは天と地をつなぐ世界山の意味をもち，神や先祖の通路として創世神話とも関連する。太安郷汝寒坪村では，柱に豚のボウコウをふくらませたものを吊してある。大きいほどよいといい，家運発展のために吊す。また中央の柱を父の柱，隣の柱を母の柱といい，父の柱の黄栗３本の内２本は母を表すという。初めて収穫した初穂を柱に掛けると，前年のものは焼く。昔２本の柱があり，一本は天，一本は地を表した。柱（ムトゥ）は天を支えているので初穂を祭るのであるという。

・屋根にはいくつかの小穴があけられており，星をかたどったものとされている。家族の日常生活が星のように順調に進むようにという意味があり，また射込む太陽光線の角度で時間を知る手段ともなる。屋根の穴（星）は，６兄弟を表したもののほか，人間生活に必要な５星（木・火・土・金・水），世界が開いたとき生まれた９人の兄弟（９星）や次に生まれた七人の姉妹（七仙女）を表したものがあり，合計27星ということになる。太安郷汝寒坪村の民家では，屋根の穴が３つの家もある。なお，ナシ族では，太陽は男・左を，月は女・右を象徴し，生活が順調に恵まれるように家の壁にも描かれている。また太陽と月がオヤであるのに対して，七星はコを表すともいわれ，女性の民族衣装である皮製の背当には両肩に日月，背に七星を象徴した円形の飾りが縫いつけられている。白沙郷竜泉村では，棺の蓋の裏に金銀の紙を丸く切ったもので七星を貼るという。大晦日には，太陽と月が出会う。

・正月に竈神を祭り，庭の門にも神を祭っているが，厠には神を祭らない。

・麗江県塔城（郷）では，家族が病気になった場合，鬼を追払う儀礼をする。６月や12月の24日に鬼を追払うこともある。村ではトンパが，一族では男の年寄かトンパが，家庭では父親

（できなければトンパ）が行った。

3．ナシ族の人生儀礼

・白沙郷北岳廟。出産は自分の部屋で行い，姑が子供を取上げてくれた。今は保健医がする。胞衣は以前は捨てていたが，栄養価が高いために身体が弱い人や子がない人が今は食べることもある。胞衣を被って生まれる子供は珍しいが，寿命は短いという。坐産で生むが，火をつけて暖かくしておくと出産しやすい。臍の緒は鋏を火にかけ水につけて冷ましてから切る。産後一週間ほどは草の敷物に寝て，その後で布団の上に寝る。出産後には米酒を必ず飲む。満月の祝いには，いろいろな女性客を招いて宴会をする。女児よりも男児の方が人気が高い。昔，二番目の男児が生まれると，玄関に銃をかけた。男児が二人いると，一人は軍隊にならねばならなかったからである。また男児が多くいる場合には，兵隊にならぬために僧侶やトンパなどになった。

・塔城（郷）。婚姻の際，イロリの男座に嫁側の兄弟や親戚がつき，女座には婿側の兄弟や親戚がつく。東北隅の神棚の下にトンパが坐し，炉には神のものをおく。嫁と婿はイロリの下の土間にかがんで，額にバターを塗ってもらう。寝室は奥が嫁（女）で，外側に婿（男）が寝て，カーテンで間を仕切った。

・塔城（辺甸）。死者はギメムトゥスジャの側に寝かせ，イロリで線香をつけて墓に行った。途中，橋を通る際には線香を4本たて，道路の危険なところや道が別れるところにも線香を立てて行った。

4．ナシ族の歳時儀礼(1)（原則として記述は農暦＝旧暦による）

①魯甸郷新主村。

・正月元日（春節）。早朝，男が近くの川や井戸などにきれいな水を汲みに行き，料理を作る。松，線香，油であげた餅を持っていく。庭の真ん中には大晦日に用意しておいた松（三階松）を立てて，その下に15日まで線香をあげる。15日に松をはずすと，いつも祭りをしている場所にもっていき線香をあげる。

・祭天。正月元日にナシ族の守護神である三朶神を祭り線香をあげる。2日には山に栗や柏樹を山に取りにいく。3日には人やさまざまな道具を洗い清める。4日は祭天の場所に行き，祭具をたてて遊んだりする。ヤークイ（鬼を射る）のため，弓を射る練習をする。トンパは太い線香を一晩中つけ，男たちもそこに泊まる。翌5日の早朝に豚を運び込み，きれいに洗ってから松の前に置いて，トンパが経典を読みながら天を祭る。豚は殺してみなで分ける。元来は牛を殺していたという。豚は煮たあと米などとともにささげる。祭壇には三本の木をたて，左の栗は天を，中央の柏樹は天のオジを，右の栗は地をそれぞれ象徴する。木の下には小石を置き，殺した動物の血をつける。卵も災難除けに供える。

②白沙郷北岳廟。

・正月（春節）の準備。24日から各家で先祖を迎えるためなどの準備をはじめる。

・大晦日。この晩に悪い夢をみると一年間悪いことが起こるので，寝ずにずっと起きていて，12時になると爆竹をならす。大晦日には，鶏を殺したり豚の頭や尻を煮て春節の食物を作り，玄関には松片卑坊や春聯を飾る。また松葉をたくさん庭に敷き，柏樹などを香炉で焼いて芳香を出す。先祖を家に迎えて祭るためである。この晩の御馳走は家族だけでなく，犬や豚などにもよい食物を用意する。家によっては，犬が豚肉（凶）と米（吉）のどちらを先に食べるかで占いをする。また足を洗わないとよいことがあっても間に合わないといって「洗脚」をする。子供たちが祖父のために水を用意する地域もある。
・元日。男の人は早く起き，小銭をあげて浄水を汲む。この間，女性は寝ている。糯米やトーモロコシの粉を丸めて油であげた餅を作る。蜜餞や瓜子などの菓子も食べる。元日は新しい年の始めだから，喧嘩や掃除はしない。女性は門の外には出ない。春節は15日で終わり，その後に松は焼いたり家畜小屋に置いて処理する。
・祭天。正月10日に，祭天の場所に，豚を殺して，先祖の神を送る。当番は毎年輪番でする。11日にはさまざまな御馳走を食べる。12日に一家一人の代表が集まる。参加するのは男子のみで，15才以上の女子は参加しない。現在は行っていない。残りの３日間（13～15日）は，親戚を訪問したりする。一族毎に祭天場がある。
・開門節。１月20日。線香をあげて観音さまを祭る。今は茶花節という（茶花＝椿のこと）。寺の仏を毎年一体ずつ祭る。最初に寺の門を開ける時には人によくないことがある恐れがあるので，まず鶏を開門前に寺に入れてから人が入る。
・北岳廟の祭礼。２月８日。北岳廟にはナシ族の英雄の三朶神を中心に白族と蔵族の妻の三神の像が祭られ，両脇には黄狗将軍と三朶神の石を運んだ人の二体の像がある。三朶神は羊なので，２月の羊の日に祭りをしたという。白族は稲の収穫後に祭りをするが，蔵族はあまり三朶神を信仰していない。２月７日に羊を一匹殺して三朶神を迎えにいく。昔は道士がおり，現在の文化局の管理している場所まで神迎えにいった。まず三朶神に参り，線香を焼いて，豚の頭，鶏，菓子などを供えた。料理したあとに再び参って供え，人も食べる。（三朶神＝三多神）。
・竜王会。３月半ばに，黒竜潭で祭りがある。
・清明節。墓参りをする。清明節，６月，12月の年に３回ほど墓参りをする。
・立夏。蛇その他の邪悪なものの侵入を防ぐため，庭の外をまわって灰を撒く。
・端午節。御馳走を作って，門の扉に粉や蒿枝（ヨモギ）をつける。
・火把節。６月。村では大きな火把（たいまつ）を作り，各家でも火把をもってあちこち行き祭る。若者は菓子や食物をあげる。
・先祖祭り。６月５日に先祖を思い出して墓で祭りがある。一族によって祭日は違う。和氏や木氏はタピュー，趙氏その他はトンバシュという。11，12，14日。
・中元節。７月。麗江の町では10日から，この村では12日から３日間行う。12日の朝食後，玄関の前から「先祖さま，家に帰ってください」といって先祖を迎える。封筒に先祖の名前を

記した金銀銅の紙を入れ位牌の前に供えた。線香や柏樹を焼き芳香をたてる。13日には先祖を祭る。迎えてきた先祖には食事毎にそれを供える。14日の日没の頃に先祖を送る。小麦粉に砂糖を入れ油で揚げたもの，果物，さまざまな料理を作って供えてから先祖を送る。先祖の位牌は台所または二階などに祭られている。臨時の位牌は祭りのあとに焼いてしまう。

・中秋節（十五夜）。月餅を作って，月のよくみえるところに瓜，菓子，菓物などとともに供えて家族団らんで過ごす。里芋はまだ出来ていないので供えることはないが，シャンズという風邪の薬になる草を月餅に入れることはある。

・重陽節はしない。9，10月はとくに行事はない。

・冬祭り（ツピュー）。11月1～4日。御馳走を作り神に供えたり，親戚を招待しあった。昔は墓参りに行った。

・冬至。糯米でご飯をたいたり，御馳走を作り食べる。若者は一才増え，年寄は一才老ける。

・トンバシュ。12月5日。清明節と同様に，先祖の墓参りをする。

③白沙郷木都村。

・春節の準備。12月に入ると買物など支度をはじめる。24日には家の掃除をする（打掃）。松飾りは各家では大晦日までにし，村でも辻などに松飾りをする。松には長寿の意味がある。大晦日には豚や鶏を殺す。鶏は一番大きな雄鶏を殺して，その頭の部分を見て，来年はどういう年になるかとか家族や作物の出来などさまざまな占いをする。頭の肉をみな取り除き鶏の舌やとさかなどをみる。財産は鶏頭の眉間をみて占う。大晦日の団らん飯は人が食べ終わってから，犬に与える。

・元日。男は早朝に起きて線香を持って水を少し汲み，いろいろな寺に参る。水を汲む場所は家によって異なる。一年間十分な水がよく飲めるようにという意味である。朝食には動物の肉や脂身は食べれない。酒，茶，ノンジャ（糯米でつくった揚げ餅），カレ（トーモロコシでつくった揚げ餅）を神に供えて食べる。一年の始めなので家族全員で祖先の墓に参る。先祖の位牌の下に小さな棚を作り，松葉を敷いてノンジャを供える。和文坤さんの家では以前は二階に先祖の位牌を祭っていたが，先祖に供物を捧げるため台所の竈のそばに移したといい，家の年寄（男女は不問）が供える。

・清明節。墓参りをする。線香，桃の花，御飯，いろいろな食物を持っていって墓で食べる。さまざまなものを用意して一日中行う。なお，墓を作るときに山の神を祭る。これは木の下に石を置いて一族毎に祭っている。

・先祖祭り。6月15日。墓から先祖（位牌）を迎えてくる。祭りの際，墓から先祖を迎えてくると堂宇にかざって祭るが，一枚の紙をかざることもある。

・中元節。7月15日。13日の朝，墓から先祖を迎えてきて位牌をかざる。墓でなく辻から迎えてくる場合もある。大人（男女）が一人でする。家からは，酒，茶，水，火をつけた線香を持参し，墓で腰をまげて拝み迎えてくるが，地面に頭をつけて拝む人もいる。林檎，梨，クルミなどの果物や炊きたての御飯などを供える。食事の前に先祖のおかげでさまざまな食べ

物ができましたといって供える。灯明をつけ，線香も絶やさずに燃やす。解放前には，先祖の名前を書いた紙を封筒に入れて供えた。14日の日没直前に，一人ずつ拝んでから先祖を送る。酒，茶，果物，食事などを少しずつ取って，お土産として持っていく。それらの供物は先祖を迎えてきたところの小川（溝）に捨ててくる。15日は家の行事はなく，お寺（北岳廟）でする。若者の遊びを中心だが，老人も集まって歌舞をする。線香も焼いた。ナシ族の民謡のウムダという歌をよく歌った。鷹（ウー）という鳥はかわいそうだという物語を歌ったものだ。

・中秋節（十五夜）。月餅や果物などを用意し，家族揃って月見をする。月餅の味は家毎に異なり，親戚間で贈答しあう。この夜，月に雲がかからなければ，畑の収穫はよいともいう。

・冬祭り。11月。２日に豚の屠殺がはじまる。気候が寒くて肉が扱いやすく，農作業も忙しくない時期である。豚の腹に血がたくさん残っていると食糧が豊富になるといい，少ないと不足気味だと占う。昔，豚肉の厚さを誇り，厚いと家族の生活は幸福だといった。豚は年に２頭殺して自家消費するが，肉を干して保存すると香りが出る。

④白沙郷竜泉村。

・春節の準備。農暦11月は冬月といい，下旬頃から準備の相談をはじめる。春節用の豚を屠殺（殺年猪）したり，糯米・大豆・トーモロコシ・小麦などを粉にしたり，果物の砂糖漬（蜜餞）を作ったりする。

・大掃除。12月24日。朝，家の掃除をする。とくに台所や，先祖の位牌のまわり，ランプなどもきれいにする。掃除の後，門神や春聯をはる。自分で書く家もあるが，買ってくる家もある。

・竈神（火土神）。12月24日に竈神を迎えて，春節の終わる１月15日に送りだす。掃除の後，台所の入口の上の壁に春聯を貼る。

・大晦日（除夕）。雄鶏を殺し，血を出し血の塊を再び鶏の腹に入れて生きているように箸をさして雄鶏をかざる。鶏丸一羽の意味である。以前に殺しておいた豚も，頭と尾をとって間に脂肉をおき丸一匹とみなして供える。人数が多くいることはよいことなので，灯篭を争ってつける。門の両側に百合花・竹・柏樹・青松・梅花を飾る。これらは春を表現したもので，日本の門松に相当し，15日まで飾ってから片付ける。正庁の二階の真ん中の壁にある先祖の位牌の前に机（木盤）を出して豚と鶏を供えすべての準備が整うと，わが家は食事の準備が終わって食べられますの意味で，若者を外にやって爆竹を鳴らし他の人に知らせる。先祖を祭る前に，予め汲んでおいた水に艾草（よもぎ）２本と竈で焼いた石２個をいれて蒸気を立て邪悪なものを追放する。供物を門神の前に持っていって拝々したり，家畜小屋に行って繁殖するように祈る。先祖を祭ったり，門神や家畜小屋で拝々する際には，線香や金銀の紙銭だけでなく，柏樹の葉も燃やす。これは汚い鬼や霊の侵入を防ぐためで，衛生の意味がある。その時，門は閉めて他の人は中に入れないようにする。大晦日の夕食は除夕飯（ナットホ）という。家の外にでている人はみな前に戻ってくる。まず鶏の頭や豚の頭・脂肉・尾から少し肉を取って火の中に入れ，年長者から順に拝々する。食事の前に，お椀に水・塩・御飯を

少しずつ入れて門の外に撒いて線香をともす。これは鬼の侵入を防ぐために，鬼に食べ物をあげる意味だという。終わると肉を切って食べはじめる。はじめに鶏を食べる。鶏には悪い霊魂などがついているので最初に食べてしまう。鶏はムカデを好み毒がある恐れがあるということで，別に宗教的な意味はない。置いておくと虫が通って毒がつくので早く食べるのだともいう。一番価値のある肉は豚の頭で，これを食べないと春節を過ごす意味がない。山芋や大きな豆腐も食べる。この村は農業が主でないので，正月の祭天の時には犬にも食物をやるけれども，大晦日には特別あげることはない。しかし，盆地の下の方の村では，犬は穀物の種をもたらした動物なので，まず最初に犬に食事を与えてから，人が食べはじめる。この晩は門は閉めているが，一番親しい友人と一緒に食事することはある。来る人は礼物を持参し，年寄に拝々してから食事をはじめる。食事の後，足を洗わないと年中夕食に間に合わないといって，「洗脚」をする。寝る際に，その年の干支でない男を一人選んで，金紙・銀紙をもって堂や竈や小屋を点検させる。

・元日。早朝１時に，その年の干支とあう男が起きて，「開門大吉」といいながら門を開ける。次に，台所の竈の門を開ける。前日の大晦日の夜，食器その他が油のにおいがしないようにしておく。竈の灰も出して薪を入れ，マッチもおいておく。その後，線香３本，金銀紙，バケツをもって，川に水を汲みにいく。川で，線香と金銀紙を燃やして水神に祈りながら水を汲む。先祖に供えた水を新しいものに替え，竈で湯を沸かして顔を洗う。元日は女性は寝っぱなしである。新婚の男は，夜中１時に財神閣に行って，発財できるように線香を燃やして拝々する，次に竜泉寺に行き，入る前に爆竹を鳴らして村人に参ったことを知らせる。男は帰ってくると竈に火をおこし，疲れているのでまた寝る。元日の食事は肉食せず精進にする。料理は最初に男がやってから女がとりかかる。元来は男が作るものだったようである。糯米の揚げ餅を作る場合も，男が鍋に油を入れて，女は入れてはいけないという。元日の食事は，ノジャ（糯米の揚げ餅），餌鈌（粳米で作る），粉皮（小麦・トーモロコシなどの粉で作る揚げ餅で，黄や紅などいろいろな色のものがある。コレという）を食べる。バター茶や饅頭を作って食べる人もいる。この日は掃除もしないし，ゴミも出さない。元日には，さまざまな供物を机にのせて，先祖の位牌，門，家畜小屋，竈などを拝んでまわり，爆竹を鳴らす。供物は，一年が12ケ月なのでノジャを12個使うが，閏年は13個使う。終わると，先祖の位牌の前に供物を供えて家族が拝々し，年長者は年下の者にお年玉をあげる（圧歳銭）。この日は，麗江県の女性は早起きして働かなくてもよいので幸福である。門の外にも女性は出てはいけないという。幼い女の子は出てもよく，他人の門に入ったりするとよい子だと喜ばれる。幼い男の子なら大歓迎だという。

・打牙祭。正月２日。鶏を殺したりして肉を新年の最初に食べはじめる日である。大晦日の残りの肉なども食べる。この日は先祖だけを祭る。女の人は早く起きる。爆竹も必ず鳴らす。この日から親戚を訪問しあいながら拝々する。近い関係の筋から遠いものへと年始礼をして歩く。家によっては，年輩の人が親戚の若い人を招いて食事したりする。年始の際には，米

を一皿，紅色の砂糖の塊を4個もっていく。嫁に行った娘は，米・砂糖・酒・茶の4品をもってくる。15日までは，相互に招いたり御馳走したりする。また春節には，新婚夫婦などに皮縄を出させてブランコをする。旧年を捨てて新しい年を迎える意味があり，老婆は低く，若い人は高くこぐという。

・仕事始め。親戚の人が商売をしていると，15日までの間に占いをする。東西南北のよい方角に馬に乗って回ってくる。「出行大吉」という。皮匠の場合，春節の間の吉日を選んで仕事をすることがある。

・祭天。正月4日から木氏と和氏の一族で行う。身分の高い人から順に店を祭る儀式を行う。この村は外族が多く入っており，自分たちの権力をすでに確立している一族では祭天はしないという。

・元宵節。正月15日。この晩，放河灯といって，水に浮くように水葉と竹で作った提灯を川に流す。これは遊びのためだけでなく，男児がいないときなど子授けを願って子供の少ない人がよく行う。また空明灯といって，新婚夫婦がその年の災難を追出すために提灯を空にとばすこともする。小さな7つの提灯をつけた七星灯を作ってとばすこともある。

・北岳三朶節。2月8日。竜が頭を上げ出現する日。女性が竜をみると災難があるが，男性が竜をみると運がよい。タメクプ（丹毎空普）とは根拠地の門を開くという意味で，麗江の盆地に斧を一つ入れると母の家（北沙中学の近くにあった）になったという。この日だけ戸をあける。トンパがその儀式を担当した。人が入る前に必ず雄鶏をドアの中に直接入れた。鶏を先に入れる意味は，この家はずっと戸が閉まっていて鬼などの悪気があるかも知れないというのが一つで，今一つは雄鶏をまず入れて死んだなら鬼に供物として捧げるということである。もしこの祭りをしなければ人を食べるなどの悪事をすると信じられていたが，文化大革命後は中止になった。それまでは，盆地に住んでいる人は必ず線香を燃やして祭りにやってきた。この祭りをすると堅く立てられるようになるという。またこの日は対歌（かけ合い歌・歌垣）をする。野原で男が先に歌って，女が対応して歌う。若者は若者同志，年寄は年寄同志で対歌をする。即興歌，謎掛け，愛の歌などを歌った，日本のコト八日や打植祭に通じる要素がある。

・清明節。線香や柳の枝をもって墓参りする。墓毎だけでなく，家の門の両側にも柳をさす。この日の御馳走や供物は，米灌腸（豚の腸に糯米を入れたもの。モブ），ゆで卵，粉皮，ハム，豆腐，ノジャ（糯米の揚げ餅。パパ）などである。

・サワーツュペ（韶瓦朱本）。3月の先祖迎えの行事。3月12，13，14日。位牌の中に金銀の紙を入れないだけで，あとは中元節とほぼ同じである。3月と7月の先祖祭りの場合は，豚を殺さずに豚肉を買ってきてもよいという。

・立夏。竈の中の灰を取って家の周りに撒く。毒虫や悪いものが侵入しないようにの意味がある。雲南の人は温泉に入るという。

・端午節。5月5日。この日に取った草はみな薬草となるという。艾草を家屋に挿したり，五

色の糸を腕に巻きつけて鬼を防ぐ呪いにする。朝は糯米の飯を食べ，昼は頭に赤い点をつけた包子を食べる。この包子は人間の頭を表しているという。夜は普通の御飯にする。「三国志演義」にも諸葛孔明が瀘水という川に行った時，原住民が人間を殺して鬼を祭っており，すでに多くの人が犠牲になっていたので，人の代わりに饅頭を作って祭るように諭したとある。また雄黄酒も飲むが，これは妻がもし鬼だとすると，本当の姿が現れるというので飲むという。

・トウバシュ。6月5，6日。木氏や和氏はトウバシュとはいわず，タッピュ（套比）という。夏祭のことである。

・火把節。6月24日。昆明の王が，雲南西南の王の3兄弟の王子を招いたが，末弟の妻は賢く殺されるから行かないようにいった。しかし，失礼になるからと行くことになり，妻は夫（末弟）に腕輪をさせた。夫は妻にマニ車を代わりに渡し，もし数え切れないときは災難にあったと思えといった。昆明の王は，松明楼という建物を建てて3兄弟を中に入れたあと燃やしてしまった。3人の死体のうち，末弟は腕輪をしていたので妻が発見できた。この3兄弟は人民にたいへん人気があったので，この日に火把（松明）を燃やして記念にする。松明は，松の木を切って百合の花，竹葉，柳葉を中に入れ，端午節で用いた五色の糸もしばって焼く。新婚夫婦は一番高い松を切ってきて村のために立てさせる。18才以下の未婚の子供たちが松を細かく切って巻きつける。松の木の下には机を長く置いて，村人を招いた。この夜には空明灯もあげた。一番高い松明は10～20メートルあり，道の辻にたてる。机は東向きにたて，その両側に人々が座って，歌ったり踊ったりしながら，飲み食いする。歌を歌う人も新婚夫婦に頼まれて歌うが，自己負担で足りないと村が援助する。村は金がないので，木を切って金を作る。今は小さな松明だけをたてている。翌日や翌々日には，子供たちが各家の前に小さな松明をたてて燃やした。子供たちは各家の門にさしてある松明をもって遊んだりもした。伝承によれば，この松明をたてないと，子供は病気になって死んでしまうという。また松明をもって畑に行って回ると収穫がよいともいう。

・中元節。7月中旬。7月12，13，14日からはじまり，3日間行うが，家により祭日は異なる。一族が集まって輪番でする場合もあり，いくつかの家族が組んで豚を一頭買う約束をする。四角な机の周りに集まって豚を殺す。松の木を切って机に結びつけ，栗の木を何本も周りに結びつける。太い線香を2本あげる。各自は，米や麦など五穀の一つを椀に入れてもってくる。椀の上には柏樹の枝をのせ，南瓜の花をつんでさす。最初に豚を迎えてくる行事がある。買ってきた紙の位牌に先祖の名前を書いて，金銀紙を入れ，机の上に供える。こうすると先祖を迎えてきたことになり，墓から迎えてこなくてもよい。最後の第3日目には，この位牌を焼くが，先祖を送る意味がある。前もって集めておいた柏樹や線香を鍋の中で燃やしつづける。各家の年配の人から順に線香をあげていく。その後で豚を迎え，灯りをつける。線香は絶やさず燃やしつづける。先祖を迎える特別の作法はなく，名前を書けばそれで迎えたことになる。このとき，年配の人は「先祖はここにいらっしゃった」という。殺した豚には5

種類の穀物を供え物にするが，祭天の豚とは意味が異なる。各家では何も供えたりしない。先祖の位牌や使った木などはどこかで燃やしてしまい，穀物は寺の池の魚に食べさせてしまう。

・仲秋節（十五夜)。これは革命の節で，ある政権を倒し別の政権をたてるための節である。秦朝は，鉄の農具を多く集めて一つの道具にしたので農民は困った。農民は政権を打倒しょうとしたが，人々を集めることが難しかった。そこで，月餅に打倒の日を書いたものを入れて知らせた。月餅毎に布に字が書いてあり，暴動の日を知らせることができたので，今も贈答しあう。石榴，蜜柑，梨，栗といった果物や落花生の煮たものなどを月の見えるところに供えて拝々する。

・冬祭（ツピュ)。11月２，３日から，木氏の一族から始めて冬祭をする。次に和氏の一族がするというように祭りの順番がある。６日までする。

・冬至。糯米の御飯を食べる。他に活動はない。「冬至新星歴」とか「冬至一年生」といって，動植物を含めてすべてのものが一つずつ年をとって若くなる。

・収穫祭。11月下旬。収穫が終わった後，まず牛が疲れているので牛を祭る。牛にいろいろな食べ物を用意して食べさせ互いにお祝いをする。

５．ナシ族の人生儀礼

①産育儀礼。金山白族郷大来村。話者は，木潤芳（68才)，和翠華（74才)。

・出産は嫁ぎ先の自分の部屋でする。出産の後，青刺（トゲのある植物）や鎌を部屋の入口の壁に直接挿したり，産婦の枕の下に置く。こうすると，外の悪いものが入ってこない。

・特定の決まった産婆はおらず，主人の母（姑）に頼んだり，他の関係のよい親戚の婦人に頼んだりする。

・出産は，ベッドに手を着いてしゃがんだ姿勢でし，草席（稲藁であんだ莚）の上に生み落とした。寒い時には，火火唐をおくこともある。子供を早く娩出する方法はないので，どんなに痛くともがまんする。初生児の場合，出血が多いとみんなに心配をかける。血で汚れたものは，姑に洗ってもらうか，一ケ月後に自分で洗う。

・臍の緒は，鋏などで切った。消毒せずに使ったこともある。切ったあとは，麻の縄で縛っておいた。胞衣は，家の後ろに埋める。男女による区別はない。

・生児は，生まれるとすぐに，お湯で洗う。毎日一回ずつ洗い，一ケ月ほど続ける。

・出産後，労働力が多いときは山での畑仕事が主だったので，産婦は一ケ月くらいは休んだ。条件が悪いと，10日後には犬に餌をやったりして働きはじめる。しかし，一ケ月もたたぬうちに，産婦が家の外に出るとみなに笑われる。

・出産後，主人（夫）は，米の酒一椀と線香３本をもって，嫁の両親の先祖を祭ってある位牌のところにいって拝々する。母親は，卵や雌鶏をもって見舞いにくる。子供が一ケ月たったら，子供の衣服などを送ってくることもある。出産一ケ月後に，両親は米と鶏（父親なら雄

鶏，母親なら雌鶏）をもってくる。

・命名式。一ケ月以内に名付けをする。命名は，まず義父に頼み，いない場合は自分の祖父に頼む。双方の祖父がつける。命名と同時に，産婦の母親は子供を背負うものや小さな布団をもってくる。

・子供の祖父およびその兄弟（オジ）は，産婦の部屋に入ってはいけない。御飯をもっていったりする主人（夫）はよい。嫁と祖父（義父。主人の父親）は避ける。結婚式の時から，義父に話しかけてはいけないといい，義父に出合ったらたたなければならない。

・外から見舞いに来た客は，まず竈に寄ってから産室に行き直接行かない。外来者の身についた鬼その他の邪悪なものを竈神に追出させるためである。嫁入りの入家式の時は直接部屋に入り，竈にまず行くことはしない。

・母乳の少ない場合。毎日３回，米の酒や卵を飲んだり食べたりする。またはじめは出ていたのに少なくなった場合は，他の産婦に母乳を取られたと考えて，その産婦を招いて御馳走する。

・初外出。初外出の際は，最初に自分の両親の家に行く。贈ってもらった負子で子供を背負い，米の酒，紅の砂糖の塊，卵をもって行く。帰る時に，米，肉，卵を母親からもらってくる。子供をおぶって出る時には，鍋墨を額につけ，帽子には針をさし，子供の背には青刺と鎌をさしていく。外の鬼や悪霊を防ぐためにする。

・出産の俗信。

　兎を食べたり，直接柄杓で水を飲んだりすると，兎口の子供が生まれる。

　死んだ家畜（豚など）を食べると，うまく子供が生めない。

　馬の手綱を跨ぐと，人の妊娠期間（10ケ月）が馬のそれ（12ケ月）に延びて難産する。

　新婦のきれいな衣装（白虎の模様）を触ると，子供を生む能力を奪われる。

　他の新婚の嫁のものを触ると，自分の子供を生む能力が奪われる恐れがある。

　新婦の毛布を作ったり触ったりしてもいけない。

　死者の埋葬場所を決める風水師のそばに行ってもいけない。

・観音や娘娘廟に行って子授けを祈願することはあるが，特定の出産や安産の神はいない。早く子供ができるように，新婚夫婦の布団の中に西瓜の種を入れることもある。

・結婚後２，３年たっても子供が生まれない女性の場合，外部からシャーマンのような人（巫女）を招いてきて「退白虎」という儀礼をする。砂糖，米に旗をさして白虎を退散させる儀礼である。また不妊の原因を占って，その占いの結果でさまざまな処置をする。たとえば，木の所為であったら，松，栗，柏樹などの木を祭る。「橋を作れ」という場合もあり，小さな川にわたした橋を象徴的に作る。

・流産。占いをして原因をさがし，祖先を祭るとか墓参りするとかの処置をする。流産を繰り返して子供が生まれない時には，墓を移すこともある。子供は祖先から送ってもらうものだという信仰観念がある。

・子供がいつも病気にかかってばかりいる時は，まず占いをする。結果はたいてい同じで，異

常死した人の魂が子供についているためだという。紙で作った衣服を使って儀礼をするが，腹の空いた鬼には食物をあげ，遠くで死んだ鬼には紙銭を焼いてやる。

・子供のかかりやすい病気に，ソクジユ（驚いて魂が抜けてしまったもの）と中風（目が定まらず高熱がでるもの）がある。鬼を追放する簡単な儀礼をするだけである。占いで鬼のきた方角を知り，土器に髪毛，竈の灰，少量の御飯と肉を入れ外に捨てる。

・子供が生まれた後，何度も夭逝する時には，子供を青刺の中に捨てたり，シュロの皮に包んで捨てる。同様にして川の中に捨てることもある。シュロに包んで捨てると，子供は毎日シュロの繊維を数えるので，その魂は人間社会に帰ってこれない。

・産婦が死亡した時は，土葬でなく，棺に入れずに火葬にする。

②産育儀礼。太安郷汝寒坪村。話者は，楊作林（73才），和国柱（59才）である。

・子供が生まれると，産婦の両親に知らせる。生まれた当日知らせるが，夜出産した場合には翌日知らせる。夫に頼んで知らせるが，この時は何ももっていかない。

・産婦の母親は娘のもとに，卵70～80個，酒一缶，米７升，雌鶏一羽を贈る。そして新郎（夫）の家の先祖の位牌の前で拝々し，一週間くらい生児の身体を洗うなどして産婦の世話をする。

・産婦の部屋の入口には青刺や鎌を魔除けとしてさす。産婦の部屋に入ってもよい人は母方（女系）の親戚で，入っていけないのは外来の客，男性，妊婦，閑飯の人（労働せずに飯を食べている人）などである。

・胞衣。胞衣は家の前か後ろに埋める。漢民族は薬として胞衣を食べるという。

・10～20日位の間に客を招く。その間，招待客のために準備する。用意する料理はお椀８つ，皿８つで，魚・鶏・酉禾肉（肉団子の揚げ物）・丸子・百合根・木耳・大肉（豚）・肝子（レバー）などを用いる。御飯を食べる前に，椀の中に２つに切ったゆで卵を入れて米酒湯を注いだものを飲む。この際，先祖に子供が新たに生まれたことを知らせ，御馳走を供えて守ってくれるように祈る。生まれてすぐに先祖に知らせなくてもよい。

・命名。トンパに頼んで命名して貰う。男児の場合は雌鶏（母鶏）２羽，女児の場合は　雄鶏（公鶏）１羽を，祖母が贈る。トンパは，雄鳥を殺したあと羽を取って三朶神（北の方角にいる）に供える。２本の線香を囲むように紙を立てる。その紙には「崩実三朶」（ボシサンド）と書く。崩実は白沙郷の三朶（三多）廟のある地名という。まず拝々してから，占い道具の海肥（投げるの意味。実際は小さな宝貝２つ）を椀の中に投げて貝が一つは表で今一つは裏を向くようにしてから占う。この時に「金海肥，銀海肥，金不怪，銀不怪（おかしくない文句がないの意味），尼剛満三尼，扁那你三尼，明剛満三思，扁那你三尼，歓々喜々，大吉大利」と唱える（経典を読む）。子供のために祈るので，悪いことは言わずおめでたい言葉を言う。トンパは占いの後で命名する。男児の場合，海・春・潤・光・寿・社（社会主義の社）などの文字に結びつけて名をつける。これらの漢字を，文字と文字を結びつけるのに使う。トンパが殺した鶏の右脚は女を象徴し子供の母親の家の中に置き，左脚は男の象徴で子供の父親の家の中に置くという。鶏の肉の部分は煮て母親に食べさせ，頭と羽の片方は

トンパにあげる。命名してくれたトンパへは，お礼として豚肉一条（肉塊一本）・酒一斤・米１０斤ほどあげる（送東巴)。命名の日には，年寄りはイロリの周りに座り，年長者から順に生児を抱いていく。身体の弱い子供には木の名をつける。

・鶏を処理したあと，客を招く（待客)。客は送礼として，30個の卵・鶏一羽・米２升・米酒一缶・衣服（子供用）一套持ってくる。最も近い親戚である産婦（母親）の両親は，200個の卵・衣服・背帯・小被子（小さな布団）・米20斤持ってくる。普通の人なら，20個の卵・雌鶏一羽・米５斤（2.5キロ）・毛織２支でもよい。互いに贈答しあって関係を緊密にしていく。貧しい家庭にはやや多く持っていく習慣である。産婦からの返礼は母親に頼んでしてもらうが，まず衛生院に20個の卵・砂糖２塊・囲腰（ベルト）一本送る。返礼は一割ほど返し，200個の卵なら20個，20個の卵なら２個，鶏一羽なら卵一個である。

・初外出。一ケ月たたないと，産婦は門から出ない。生児がはじめて家の門を出る時，額に鍋墨で「＋」字を書き，鎌をもって行く。穢れを避けるためという。子供を抱いて親戚の家には入らないようにする。子供をみると，お金や肉，卵20個などを上げなければならないため，心配かけないようにする。

・安産祈願。産前に，産婦の身体が元気ならば何もしないが，健康状態が悪い時には占いをし適切な処置をする。トンパを招いて産婦の家の庭で白虎を退散させる儀礼や，呆鬼（命を短くする鬼）を送り出す儀礼（複雑で短時間では話せない）を行う。

・幼児の葬式。子供が泣声をあげてから死んだ場合は火葬にしたが，泣かずに死んだ場合には儀式はあまりせずに埋葬した（しかし，それでも悲しかった)。子供が２ケ月間生きていて死んだ場合，贈ってもらった衣服なども含めてすべて焼いた。

・子供が連続して死んだ場合は，トンパを招いて鬼を祭り，白虎を退散させる。鬼が主絶えずその家をいじめているのが原因と考えて，第３番目の子供が生まれるとすぐに竹篭をかぶせた。竹篭には目がたくさんあるので，その目で見守ってくれる。

・産婦がお産で死んだ場合には，血の海の中に死んだと考えられる。トンパを招いて，「壊除血海」を行う。産婦は火葬して墓のそばに埋める。または主人の死後に本当の墓に合葬する。男が再婚した場合は，30年を一区切として，前妻と後妻を一緒に墓に合葬する。

・妊婦が死んだ場合は，例が少ないので処置は不明だが大体火葬した。子供の頭は，まだ天を見ていないので一人として処理する。

・双子の出産。二人ともに男か女であればよいが，一人が男で一人が女だとよくない。死霊の前に供えるのは「金童玉女」で，死者を祭る儀礼と同じになるためである。

・男女の子供を区別するため，男児は前髪を残し，女児は後ろ髪を残す。

・子供が驚いて魂が脱けてしまった場合には，夜眠れずに昼寝てばかりだったり，病気にいつもかかっている子供になる。魂が身体のどこから脱けるかはわからない。治療は占いをして具体的な原因をさぐってから，魂を招く儀礼をして処置する。魂を招いた後には，猖子牙，猿尾，毒少量入れた布包などを糸で結びつけた帽子をかぶせる。

③婚姻儀礼。金山白族郷大来村。話者は，和翠華（74才）。

・婚姻では，トンパが先祖の位牌の下で新婦の額にバター（米末油）をぬる儀式がある。赤い紙にお金を入れて包み，新婦と一緒にきた身分の高い女性が箱の鍵を２本もってくる。お金と鍵を交換し，新婦は鍵をもらって箱をあけコップ（杯子）をだす。それを祖先の位牌の下に置き，主人がお茶と酒を供える。終わると，トンパはバターを少しとって新婦の額にぬる。23才で結婚し，ほぼ50年前にこの儀式をしたので，今は74才である。トンパ経典に詳しく記されている。

④婚姻儀礼。太安郷汝寒坪村。

・素柱。トンパを招いてきて，バター（抹油）と糯米粉を混ぜたものを銅器で新郎新婦の額に塗ってもらう。次に肉を一つ，切れ目を入れて二人に食べさせる。

・鍵を買う儀礼。媒人が新婦を連れて別の家に行く。その間，新郎はお金と食べ物を用意して，鍵を買う（雲南人の嫁入りでは，箱を二つ持ってくるので，その箱を開ける鍵を買う）。直接的には言わずに，「私の鍵はどこに落ちましたか」などと婉曲的にいう。第１回目は，18元で買うというが，鍵は見たことがないといわれる。第２回目は，20元といってから，「私の鍵が落ちて，あなたたちが必ず拾った」という。第３回目は，鍵を買う時，酒を増やし，お金や食べ物も多くする。そして，「必ず新郎側の人々が鍵を拾ったはずだ」という。第３回目までやると，新婦の兄弟が必ず鍵を渡してくれる。鍵をもらって箱を開け，中の毛布などを出して新婚夫婦の部屋を飾る。新婦は，ベッドの上の用品を二人分持ってくる。新郎は新婦の着るものをすべて用意し，新婦は入ってくると着替える。昔は新婦はすべて着替えたが，今はベルトなどを形式的に替える。

・新婦の両親が貧富にかかわらず必ず新婦に持たせなければならないものは，箱２つ・箱の鍵（南京錠）・木炭２つ（新夫婦を象徴。火は生活の基盤で，焼き暮らすようにという意味）・イロリ（火火唐）の盆（その上で火を燃やす）とハサミ（火用）などである。

・入家式。新婦は自分の家を出る時に泣き声を出す。大きな声ではなく，小さい声で泣きながら家を出る。新婦が嫁ぎ先の門に入ると同時に，台所の竈で料理をする人がお椀の中に水と御飯を入れ，右手で肉を差し出して門から出る。そして新婦の顔に鍋墨をつけて，新婦に穢れ（鬼）が入らないようにする。

・昔，結婚式にはイロリに鍋がかけてあり，中で肉を煮込んでいた。サジを鍋の中で動かしたり触ったりしてはいけないという。新婦は鍋をもってみんなに振舞い，新郎は煙草をみんなに配った。結婚式の後，３日間はイロリの火を絶やしてはいけない。

・初夜。友人たちが来て新夫婦を寝かせないということはない。若い人達は庭で喜んで遊び，年寄達は家の中で歌を歌う。新夫婦は煙草を配って接待する。結果的に，一晩中眠れないこともある。翌朝，太陽がのぼるとともに，新婦は起きてお湯を沸かす。新婦と一緒にやってきた人達も帰らず，男は２階，女は１階に泊まった。その湯で，客達に顔を洗ってもらう。新婦はこれらの人達と一緒に里帰りをする。

・里帰り。結婚の翌日に里帰りするが，この時には米を2.5キロ・酒４本・肉塊を２本・お茶・煙草。その他の食べ物（甘いものなど）を持っていく。新婦が戻る際に，再び両親から酒２本・肉少し・米などをもらって帰る。

・離婚はなかった。もし離婚すると，死になさいといわれ自殺するようなものである。子供を生んだ後に，別の女の人と心中する例はあった。この場合，男の家の方に頼んで２人の遺体の処理（火葬）するだろうという。未婚で死んだ場合，男は何もしないが，女子は外で焼きその遺灰は家にもって入らないという。未婚の人の両親がまだ生きている場合は何もしないが，両親がすでにいないと，死亡した人の魂を招いて祭りをする。

⑤葬送儀礼。太安郷汝寒坪村。

・葬式はトンパを招いてする。同族でなく，他の支家のトンパを招く。なぜなら，同族のトンパは葬式をすると，一年以内は別の葬式を担当できないためである。

・死の知らせ。近い親戚に頼んで知らせる。年寄りの老人が病気になって死が近い状態にあった場合には，死ぬと死者の息子または親戚の兄弟の息子が牛の角笛（男性）かホラ貝（女性）を吹いて知らせた。死亡すると，死者の頭は南西方向に向ける。

・死体の処理。口の中に米を入れる。土棺の中に水を入れ，そこに雌鶏の頭を差し込んで殺す。鶏が死んだら棺のそばに置いておく。桃の木３本取って三角の形を作り，土棺の上に置く。台所では，死者が男なら松の枝９本，女なら７本に火をつける。次に鶏の羽をぬき，内臓（腸）少々とともに土棺に入れる。死者の顔を洗う布や櫛も棺に入れる。村の東にある一定の場所にその棺を捨てる。村人は互いにそこを通って誰々が死んだことを知る。

・神路図。軒下に棺を置く。棺から家の門まで神路図を広げて，死霊を一つ一つ段階を通過して神霊の国に導く。鬼が言うことを聞かない場合には，トンパが鬼と戦うこともある。解放後はしていない。

・クワ（白鶴）。死者を西方極楽世界に送ってから，一度戻り，今度は先祖の世界に導く鳥。葬式の際にはりぼてで作る。また四方灯（ソバテ）といった四角形の提灯も作る。死者の行く世界はとても暗いのでこれを持っていく。「父親大事」などと書いて葬式の際に紙で作る。クワと四方灯は，門まで死者の霊魂を送っていった後，持って帰る。五色の紙の花（ババ）も，あの世で灯火と一緒にあるときれいなので作る。この紙の花は，茶碗に酒を入れて経典を読み，死者の頭のところで「親戚にお祈りします」という時に使う。死んでも生者に祟りをなさず，みなが順調に生活できるように祈る。使用後は，イロリの部屋の東北隅にある先祖の香炉のそばに置いておく。

・この村では，楊の一族は火葬をし，和の一族は土葬にする。火葬と土葬では超度の方法も異なる。楊の一系では土葬もするようになっている。

⑥葬送儀礼。金山白族郷大来村。

・祖父の年代から土葬になった。それまで家には火葬場が二つあった。一つは異常死者用で，火葬しても骨は拾わなかった。今一つは正常な死者用で，火葬した骨は土に埋めてためてい

た。東巴文化研究所の習先生によれば，トンパの話では，人は死ぬと２回葬式をするという。一度は火葬で，以前の骨や灰をよけて焼き，木の下に壷に火葬骨を入れて埋めておいた。２度目は１１月に先祖の霊魂を超度する時期に骨を骨壷から出して祭りをし，松の枝を結びつけた。

６．歳時儀礼(2)（記述は農暦を原則とした）

①太安郷汝寒坪村。

・先祖の香炉とイロリの五徳（３ケ所）には，食事の度ごとに少し食物を供える。大晦日から正月15日及び毎月１，15日には竈神（火土神）をイロリで祭る。酒・茶・コッレ・米・肉など５つの食物を用意し，膝をつけて拝々する。イロリは４つの材木で枠組を作り，下に５枚の板材を敷いて土や煉瓦を入れて作る。老人は，イロリの火のそばにレキュウズ（お茶を煮る茶道具）という小さな壷状の焼き物を置いて使う。イロリの奥の東北隅に箱葛（グー）を置いてあり，その上には香炉があって，毎月１，15日には線香や柏樹を焼いて先祖を祭る。グーには，いろいろな食物や祭服など大切なものを入れておく。

・大晦日。暮れの24日に竈神が昇天すると，大掃除ができる。大晦日までに掃除はすべて終わり，春節の１～４日は掃除せず，一切の祭り事が終わった４日以後に掃除する。家の門の両側にルッセパモパトイウ三角錘の石があり，これらの石は男女で夫婦だという。大晦日には，これら二つの石の下に松葉と梨子の２種を置き，さらに酒，茶，コッレ，米なども供える。石をきれいに洗ってから糯米の粉と豚脂（ラード）もつける。「ピュパマパチャ」（脂も白い，粉も白い）という。一年間に活躍するために，経文を唱えながらする。吉利吉拝。「服装を改める」という意味もある。人間もこの石と同様に新年には風呂に入り新たな服を着る。大晦日には必ずする。大トンパであった和紹武氏の家には「金の父母」（ギリチャ）の版木があって，それで刷ったお札を配り，鬼が侵入しないように大晦日に書く家で貼る。また春節には門の上に米や薬，お金などを入れた小袋を吊す。門松は立てない。春節はキゼ（吉正）という。

・元日。男が一番早く起きる。朝飯を用意してから，溝まで行って水を汲む。線香と供物を持っていき，水のそばで線香を焼き供物を供えてからみずを汲む。この水は通常の使い方をする。朝飯頃に，女性が起きる。線香を焼いて先祖を祭り，朝早く墓にも参る。

・祭天。正月４日及び５日。兄弟など３～４戸が一緒にする。祭場は山の上で一定しており，白沙（北岳三朶廟の方角）に向いている。拝々は北に向かってする。各戸（家族）の祭天と村（同族）の祭天とがある。祭場は一坪位の広さがあり，祭天の前に家族の一人が（父親または長男）麻柄で覆ってその下に寝る。伝承では犬は汚いものとされており，祭天場に犬が入らないようにするためである犬に嚙まれたら，天を嚙むのと同じことである。祭天では天空に向かって拝々するが，天は一番偉大であると考えているからである。小さい祭天は３回あり，正月の一回目は豚を殺すが，後は豚を殺さない。

祭天場の周囲には大きな木があるのが望ましい。１メートル位の高さの石積の壁を築いて祭

天場を囲む。祭りの際には，石壁の上に栗の木を挿す。石壁には小穴があいており，祭りに使用した石を納めておく。祭壇には，中央に柏樹，両側には天と地を表す栗の木を立てる。各木の前には，酒と茶及び石を供える。栗と柏樹の間に卵を木の枝にのせて供える。３本の神木の前には，四角い石の壇があって，松葉を敷きつめて米を篭に入れたものや線香を供える。石壇の前に豚を供える。豚を殺した時，その血を神木や石にも必ずかける。豚の上には，シャクナゲと蒿枝（ヨモギ）をおいて邪悪なものを避ける。トンパ経を読み，すべての穢れが除かれたあとに豚の毛を剃る。祭りが終わると，祭天の木は焼き，柏樹は持ち帰って竈の上におき燃料にする。祭天の時に唱える経典の文句は，例えば，まず「この戌の年（1994年）の新年に，この家族は上は天を祭る，下は地を祭る，中間は最大の柏樹（舅の意味）を祭る」と唱える。つぎに「線香は天に捧げる。線香は地に捧げる。線香は柏樹に捧げる」といい，さらに「なぜ天を祭るのか。長寿のため，招福のため。なぜ地を祭るのか。長寿のため，招福のため。なぜ柏樹を祭るのか。長寿のため，招福のため」と唱えて，シャクナゲと蒿枝で除穢を行う。

・楊学治氏の家には，軒下に棚があって，松葉を敷いた上に石が２個置かれている。この石は，現在の祖父母を基準にその祖父祖母を表したものという。今現在の二世代の前三代の先祖を代表するもので，先祖祭りの際に焼いて祭る。一年に，２・６・11月の３回祭る。清明節には墓に行くので祭らない。祭天の際に祭る石と同じものか。

②金山白族郷大来村。話者は，和学忠（75才），和徳偉（70才），和福厚（76才）である。1994年９月23日調査。

・春節。ギゼ（吉正）という。門松は立てない（元来は漢族の風習）。春節の15日間は仕事をしなかった。仕事はじめの儀礼もない。

・ムピュー（祭天）。この村には，祭天場が４つある。ある場所は６，７戸で，別の場所では12戸で祭りをしている。祭天の日はほぼ同じで，正月４日か５日である。祭天を行う理由について，トンパ経の創世紀の物語では，大洪水の後，崇忍利恩が天にのぼって天女と恋をして地上に逃げてきた。天女の父親（舅）は怒って，地上に災難を引き起こそうとしたので，災難が起こらないように天を祭るのだとある。またこの村の伝承によれば，昔，ナシ族の祖先がいた。その人が天に行き，天女を連れて戻った。やがて３人の子供を生んだが，少しも喋れなかった。天父と天母は，子供たちが話せないことを知っていた。天父は天母に対して，子供たちが話せるようになる方法を娘（天女）には教えてはいけないと言った。しかし，この二人の話がコウモリに聞かれてしまった。コウモリは飛んでいって，その方法を夫婦に教えた。それは，天を祭れば喋れるようになるというものであった。その結果，天を祭ることで，３人の子供はそれぞれチベット語，白語（白族の言葉），ナシ語（ナシ族の言葉）を話はじめるようになった。こうして，天を祭るようになったのであるという。

・１月３日。祭天場を掃除して，栗の木を周囲に挿す。各家から男一人が出て掃除し，祭天の準備する。栗の木で囲むのは，中に家畜などが入るのを防ぐためだという。祭天場の広さは，

参加する家が多い場合は12メートル四方位で，少ない場合はその半分ほどである。祭天場の形態は丸や四角など一定しておらず，一族や状況によって異なる。村の背後の山の下に設けられており，普段は誰でも入れるが，祭りの日には栗の木で囲んで入らせない。一ケ所に門が開けられており，掃除の後は閉めておく。この村のまわりには栗の木が多いので，この木を葉のついたまま使う。祭場には，３本の木を立てる。３本の木は，人の背丈より少し高い木を当番の人が切ってくる。２日位前に切ってきて，家に置いておく。中央に柏樹（刺柏がよい），両脇には栗の木を立てる。左右の栗の木は，それぞれ天と地を表し，柏樹は皇帝あるいは舅だといい一番目上の人を表すという。３本の木の後ろに，樺（樺樹）の木の先に卵を置いて供えるが，昔は卵でなく鶏であったともいう。３本の木の後には，持参した米を篭（ド）に入れたまま年配の人から順に左から右へと並べていく。３本の各木の両脇には小さな栗の木を挿し，前には石を一つ置く。その前には，それぞれシャクナゲと蒿（ヨモギ）を置き，豚を供える。祭天場には，松葉（青松毛）を敷きつめる。

・１月４日。日の出とともに，各家族は夫婦二人で，男は火把を，女は米をそれぞれ背負って出かける。新婚夫婦も老夫婦も同様にして出かけるが，老夫婦が背負っていく竹篭（ド＝箱の意味）の方が大きいという。もし，お爺さん（祖父）が死亡すると，息子が代わりにいくが，古い竹篭は焼いて新たに作る。息子の嫁の小さい竹篭は捨てることができる。篭は天井などに吊してネズミなどに食われないようにしておく。新しく息子や孫が生まれると，必ず使用した木椀を篭に入れて祭天のときに使う。女児の場合は椀は入れない。この木椀は毎年の祭天で使うが，息子が結婚したら捨てることができる。この日は，米を背負って行って置くだけで，他には何もせず，御飯を作って食べるだけである。御飯を食べる前に，木にも少しとって供える。女性は米を背負って行き，御飯を食べて帰ってくる。

・１月５日。この日は豚を殺して，内臓は出さずにそのまま供える。その間，トンパは経典を読み，他の人は頭を下げている。各家族でいつも招いているトンパにきてもらうが，トンパがいないときは年寄の人が儀礼を行う。豚を殺したとき，その血を木椀で受けて石の上に塗る。石は，その木の後代（子孫）を表したものという。この石は毎年使用し，捨ててはいけない。祭天のあと，外の木の高いところや山の穴の中に置いていたずらされないようにする。普通の結婚している人なら，どんな椀でも使えるともいう。祭天で読む経典は一定していない。普通は少し読めば十分で，知っていればたくさん読む。その内容はよく覚えていないが，「孟能打　呂古許」（ムノントゥロクス＝天と地　中間の柏樹）だけ覚えている。祭天は，みなが繁殖し，災難や病気が起こらないように平和に暮らせるために行っていた。殺した豚は，男性の数または家族に応じて分配する。秤を使って肉を分けることもある。豚の重量は決まっていて（大体40～45キロ），足りないともっと出させ，多ければ当番の家に返した。豚の目方を計る秤は決まっている。７月12～14日にも祖先を祭り，13日には祭天をする。基本的に春節大祭とおなじだが，７月の祭り（七月過節＝三毎吉正）は簡単にし米は必要ない。

・１月８日（初八）。清掃（ガス＝刮蘇）をする。祭天場の竈（３つ石）ですべてを焼却する。

米を入れていった竹篭に，３本の神木から葉つきの枝を取って篭にいれ家の中央の柱に吊した。昔の木楞房の時代には柱に吊したが，今は家屋も大きく変わってしまった。大雨，風，雹などが起こったときに，この木の葉をもやすとその害を防げる。天から起こった洪水なども防げるという。

・先祖祭り。春節・清明節・タッピュー（６月）・中元節（７月）・冬祭（11月）・トンバシュ（12月）などに行う。墓参りは，春節第２日や清明節に行くが，中元節には行かない。先祖の位牌は，家の２階に祭っている。２階がなければ，１階の堂屋に祭る。これは解放以前から変わり無い。結婚すると，新しい位牌を祭る。木製の札で，前の世代の人が亡くなったらすべて消して生きている世代の人の名を書く。

・北岳廟三朶節。三朶神（三多神）を祭る。男子の厄年は36，49才で３，６，９才が悪い。女子は31，47才で１，４，７才が厄である。これらの厄年を避けるために，線香を焼いて祈る。60才を下寿，70才を中寿，80才を上寿という。60才前にお棺を作る風習もある。

・中元節。７月12～14日。七月過節。12日には位牌の紙を買ってきて先祖を迎えて祭る。13日には豚を殺して祭天をする。輪番で当った当番がすべて準備を整え用意する。春節よりも簡単にする。

③金山白族郷美自増村。話者は，和士先（59才），和芝順（63才），和家驥（53才）である。1994年９月24日調査。大研鎮の南にある八河村から洪水のためにこの村に移ってきた。移動がムツゼと言うのでムツゼと村の名付けになった。歌手がよく出る。

・春節。正月春節（ユペギゼ）。12月（臘月）から準備をはじめる。「12月は誰もが気違いだ」という諺もあるほど，この月は春節の準備その他でみんな忙しい。12月は一番よい月で，とくに６，８，24日は吉日で螺をするのにもよいという。酒も12月に造り，その歌もある。ダワリィキテ（11月に甘酒を取る）ともいう。

・12月３日。一年でもっとも寒い日で，この日から酒造りをはじめる。歌にも「熊の足を嚙んでも目をさまさない」とあるほど，寒いのだという。１月５日が飲初め。

・年猪。農暦10～11月に春節用の豚を殺して干しておく。普通の家ではこれだけであるが，一部の豊な家ではナットゴ（除夕猪）といって大晦日にも豚を殺すという。

・12月24日。この日はすべてに縁起のよい日で，手足，髪，頭を洗う（洗脚）。婚礼などにもよい。朝，山にのぼって栗の枝を切ってきて，この木で掃除する。家の整理や大掃除をし，ちょっとした御馳走を食べる。栗の木は使用後に外に置いたり捨てたりする。

・竈神（火土神）。12月24日に竈神を祭ってから天に送る。天にのぼってよいことを話てくださいという。竈の上に穴があって，そこに石を一つ置いたり，お札を貼って竈神を祭っている。漢族のものだという。昔は，御飯の前に拝々し，食べ物を少し供えた。食事するときは，竈に背を向けてはいけないという。木楞房の時代には，三つ石を竈にして鍋をかけた。次に鉄の五徳に鍋をかけるようになり，三つ石の一つを取ってそばに置いておいた。その後，竈はもっと進化して，竈神の図やお札を竈の壁に祭るようになった。

・大晦日（除夕）。ナット（除夕）には悲しい意味がある。一つは大晦日で新旧の年の交替期であり，二つは３月で花は多く咲くが食料が乏しくなる新旧の食料の交替期であり，三つは７月で兄弟の分家がなされ兄弟の別れの時期にあたる。大晦日には掃除をしたあと，きれいな松葉を家に敷きつめたり，門神や対聯を貼ったりする。以前は門（玄関）の両側に石（ドル）を立てる習慣があったらしい。これらの石は，左がヤクで，右がトラを表していたとか，ドセイ（陽と陰）の神であるともいう。堂屋の真ん中の部屋または２階には，先祖の位牌を必ず祭っている。位牌の前には，灯火をともし，線香を焼き，香木を香炉でたいて，いろいろな御馳走を並べる。酒，茶，果物などのほか，豚の頭や雄鶏の煮たものを供える。全部揃ってから，家族全員で拝々する。雄鶏は時間の管理者だから，その頭は必ず年寄に食べさせる。また鶏の頭の舌の色や位置などでさまざまな占いをする。頭骨の色が黒色なら不運，白色なら無事，赤色なら財運があるなどという。鶏の上下の口が，両方とも真ん中なら父系母系ともよいという。その他，天気の善し悪しや，鶏頭を逆さにして口中に穴が１～２個ならよく，３個以上なら悪いなどともいう。舌が真ん中なら神でよく，左斜めなら父系が悪く，右斜めなら母系が悪いともいう。大晦日の夕食はナットハといい，御馳走を少しずつ取ってから，まず犬に食べさせる。ナシ族はかつて遊牧民族だったので，犬は大切な動物であった。諺にも，「12人の人間の価値は，犬１匹に及ばない」とある。犬の起源に関する非常に長い物語がある。それによれば，ナシ族には犬がいな買ったので，普米族から買った。二つ目は，雲から犬が生まれた。黒雲からは黒犬が，白雲からは白犬が，赤雲からは赤犬が生まれた。三つめは，土から犬が生まれた。黒土からは黒犬が，白土からは白犬が，赤土からは赤犬が生まれた。犬が麦をもたらしたという穀物起源神話はない（トンパ経にはある）。なお犬が死ぬと篭に入れて埋葬し，弓矢を埋葬場の上に置くという。また大晦日には御飯に水を入れて外の鬼にあげる。位牌の前に供えたものを少しずつ取って，川の中またはそばに置いてくる。この後は家の門を閉めて外には出ないようにする。大晦日には，とくに男は夜中まで起きて守歳する。夜を明かす人もいる。夜中の12時頃（子の刻）に爆竹を鳴らし，大土炉（一番大きなもの）に火を燃やし，鉄砲も鳴らす。

・元日。まず男が朝一番に起きて，壷（今は桶）をもって水を汲みに行く（ギサウ＝水気をとる）。水場の脇に線香をあげて汲む。運が入るので，できるだけ早く行く。次に，寺に行って頭香焼をする。一番早く行くと，運が家に入るという。汲んで来た水は鍋で暖めて砂糖を少し入れて飲む。新年が砂糖のように甘いようにの意味。残りの水は顔を洗うのに使う。朝早く女性は起きれないが，朝飯は女性にまかせる。最近は甘い茶やノンジャ（糯米の粉で作る甘い焼餅）を食べ，半時間後に正式の朝飯を食べる。最初に，甘酒，甘い水，ザンパ（燕麦で作る）を食べ，次に甘い焼き餅や糯米の揚げ餅を12個食べる。朝飯の後，男性はどこへでも出掛けることができる。女性は早起きすると運が悪くなるばかりでなく，元日に女性に会うと運が悪いともいう。女性は別の家や外にも出れない。元日に出れば，生活が苦しいのだと軽蔑される。逆に壮族では女性が早く起きるという。元日は，掃除もしない。正月１，

5，15日のうちでも1日はとくに大切な日なので，声も低く，小さいやさしい声で話す。この日喧嘩をすると一年中喧嘩する。元日は肉を食べず，動物も殺すこともせず，植物油を使い，甘いものを食べる。2日からは，男女とも他の家に自由に行くことができ，娯楽や運動もできる。新婚夫婦に木を出してもらってブランコをしたり，獅子舞やヤク，シカの踊りなどもした。解放前まで行い，県から賞金をもらったこともある。

春節の期間（1～15日）は，先祖の位牌の前で油灯や香を絶やさない。家によっては元日に供物の一部をもって墓参りする。

・祭天。1月2日からはじまる（トクジャ＝祭天場に行く）。祭天場は，村の後ろの高いところにある。村には，グシュ（1月4日から），グシャ（1月4日から），プトゥ（1月2日から）の3つの祭天組がある。プトゥの組では，女性や子供も連れていけず，竹篭（肉米篭＝マチュアトゥア）も既婚男性しか背負うことができない。祭天では，輪番で豚を出して殺し祭天場で祭る。祭天では，漢族の言葉を使わず，ナシ語を使用し，よい言葉だけを話す。3日には，臼をついて餅を作る。4日には豚を殺して，祭天場に入る。5日に祭天を行う。5日の祭天の小さな儀礼では，供物の一部を取ってカラスに投げ上げる。カラスは神の使者であり，供物をもって神のもとに行くのだという。祭天場には，3本の木がたてられ，中央は柏樹で王様を表し，左右は黄栗の木でそれぞれ父・天・陽，母・地・陰を表すという。柏樹の後ろには山木秋の先に卵をのせて供えた。これはムテンジュ（天を支える木）で，天から災難が落ちないように支えているという。

・棒々会。1月15日。白沙郷では，この日にいろいろな農具市がある。農具は正月の間に修理して春耕に備える。

・北岳三朶節。2月8日。線香などをもって三多廟に参る。

・清明節（3月）。一族揃って墓参りする。雄鶏を殺して食事を作る。近くに祭られている山の神に雄鶏を捧げ，その血を山の神の石につけて，「墓を守ってください」と祈る。墓に柳，線香，供物を供え，墓の順に拝々する。柳は家の門にもさす。柳を使うのは，介之推を記念するためで，その伝説もある。

・立夏。悪い虫や動物，蛇などが侵入しないように，竈の灰をとって家の周囲に撒く。

・端午節。5月5日。朝起きると，2つの卵と砂糖湯を必ず飲む。5色の糸を手首に縛る（6月の火把節までしておく）。この日は，上に赤い点をつけた包子を食べる。この月は病気が多いので，予防のために雄黄酒（チベット産の紅花を入れるとよい）を飲み，雄黄（イオウ）酒を少し取って耳につける。

・トピュー。6月1～16日。先祖祭り。1，2，4，6，8，10，14，16日というように，1日以後は偶数日に先祖祭りをする。16日は木氏の祭礼日であり，柏樹を削って塔を作り，男性先祖を表す7つの刻みを入れて祭る。

・火把節。6月24～26日。家族単位の火把（松明）と村の大火把（泉のそばに立てる）を作る。材料は松がよい。3日とも同じ行事をする。

・中元節。7月14～16日。14日朝，先祖を迎える。位牌を町で買ってきたり新しくしたりる。「本音和氏門宗」を神棚において供物をささげ，先祖の霊を迎えて位牌につける。果物，香，灯火をあげる。食事ごとに「先祖さまお食べください」といって食事も供える。迎える時は，玄関前や道から「先祖さまお帰りなさい」といって迎えて，神棚に酒，茶，油灯を供える。15日に先祖を正式に祭り，16日夕方に先祖を天に送る。リンゴ，ナシなどの果物や供物，位牌（紙）などを包んで焼く（ポンギ＝包み焼き）。送る場所は村で一ケ所決まっていてそこで送るが，煙りが高く上がれば上がるほどよいという。中元節のころは，鬼がもっとも多い。馬の足跡にも多くの鬼がいるといい，非常に病気にかかりやすい。鬼を祭ることはしない。
・仲秋節（十五夜）。8月15日。数日前に月餅を作り，15～17日の間に親戚同志で相互に贈答しあう。小さな月餅は型に入れて作るが，大きなものは型は使わない。クルミ，ゴマ，砂糖，小麦粉，油などを材料にして作る。15日夕方，月のよく見えるところに机を出して，大きな月餅のまわりに小さな月餅やさまざまな果物などを供える。月が上ってくると，四隅に線香をたてる。月が山から全部出たら「望月」と大声で叫ぶ。その後，年寄から順に簡単に拝々して家族の団結をはかる。以前は，若者たちが集まって御馳走を食べ，対歌をしていたようである。仲秋節の歌は別にない。この村では里芋も産出しないので，里芋を供物にすることはない。
・重陽節。9月9日。敬老節の意味。年寄が集まって御馳走を作る。
・冬祭り。11月1～2日。御馳走を作って位牌の前に供えるだけである。
・冬至。朝，糯米に砂糖を入れた御飯を作る。夜は御馳走を少し作る。
・トンバシュ。12月4日。先祖祭り。6月にする村もある。
・トンパが執行する儀礼。トンパは，祝福，鬼払い（鬼を追出すこと），婚礼，葬式，祭天，その他の儀礼に関与して儀礼を執行する。祝福は午後行い，経典を読み，鈴を鳴らしながら踊る。病気になったときには，鬼を追放する儀礼をする。葬式は，トンパよりもラマ僧をよぶのがここでは普通である。祭天では，天地や人類の起源などの経典を読む。自分たちの所属する一族のトンパを呼ぶが，一族の中に経典をよく読める人がいれば呼ばない。その他，家畜が病気になったときには，ゼ（鳥や家畜の神）を呼び出して祭る。村の後ろにゼピュークという祭場が残っている。小さい豚を殺してから，トンパに食べさせる。豚の脂を少し取って，人間の額につけてもらうと病気除けになる。また大雨が続いた場合には，ムトゥ（天をさせる）とい儀礼をする。村の後ろの高いところでトンパを呼んできて，栗の木と葉を焼いて煙りを出す儀礼を行う。この時，緑の栗の葉を焼きながら，必ずドラを鳴らすという。
・日蝕と月蝕の伝説。太陽の後ろに3匹の金の蜜蜂がおり，月の後ろには銀の花があるが，蜜蜂が花を取ってくると日蝕や月蝕がおこるという。別の伝説では，日蝕と月蝕は，天狗（イヌ）に太陽や月が食べられると起こるという。ドラと太鼓を使ってイヌを追いかけた。個人の家でも大声を出して天狗を追放する。以前は，村全体でトンパがきて行っていた。

7．トンパの諸儀礼

・於東巴文化研究所。話者は，和開祥（73才，トンパ）。

・1982年に，麗江に東巴文化研究所が設立された。トンパ経典の漢訳が主要な仕事であり，「経典全集」の刊行を予定している。ナシ族の文化は，トンパ文化，ナシ族の民衆文化，漢文化の模倣という３つの部分から構成されている。トンパ経典は1200種類あり，文字数も1400個ある。経典は，儀礼の中で経典を唱える際に，記憶を助けるために書かれたものであり，一字一文字というわけではない。文字と文字の間にあるものはトンパしか知らず，それゆえ翻訳は難しい作業である。トンパ文化には，儀礼にともなう音楽や舞踊なども含まれている。漢族の文化の影響で，町の中心ではトンパ文化は希薄になっているが，山岳地帯にはまだ残っているので実地調査をする必要がある。

①子供を連続して次々と亡くした時の儀礼。角のついた鬼を追い出す儀礼（トゥローツートゥ）を行う。鬼の王様をミセテ，その妻をクザナモといい，この他に多くの小鬼もいて，みなこれらの鬼は子供を食べるのだという。こうした子供を食べる鬼たちを粘土人形で作り，天の９兄弟の代表であるムズュ（弓矢をもつ）と地の７姉妹の代表であるデュズの人形も作って，鬼を追い払う儀礼をする。この儀礼を終えると，ナシ族の家の門の上に人形を吊して以後そうした鬼が家に入ってこないようにする。（怖い顔の鬼の粘土人形が研究所に展示所蔵されている）

②竜祭りの儀礼。竜王の母親は神々の母なるものであり，この儀礼についての経典もある。それによれば，われわれ人間は父２人と母１人いる。分家したが，その帽子（法帽を象徴する。この下に９個の村が立てられた）と杖は分けず，共有のものとして海の中に隠した。ある日，大自然の山，水，動物，鳥は一方の家にやった。家畜や畑などを人類は分けてもらった。しかし，帽子と杖は，人類がいかにさがしても発見できなかった。馬の足の下に，９つの畑を開けた。そういうわけで，われわれ人類は，畑を耕せず，放牧もできませんでした。そこで，人類は互いに相談して，18層の天の上からトンパシロー（トンパの祖）を招いた。白いコウモリと，ナウラサという名の白馬に乗った話のとても上手な人の２人をやって，トンパシローを説得し招こうとした。２人がトンパシローの前に跪くと，何のために来たのかと聞かれた。そこで，竜神の母親が全部のものを持って帰り，農耕も放牧もできないので助けて下さいといった。ドポッシュチュウ（腹が大きい鳥）は蛇（竜王の象徴）を食べる。毎年15日，竜王が出て沐浴するとき，その竜王の母親を木の上に縛った。鳥はトンパシローにこのことを知らせた。すでに，木の上の竜をどうするか聞いた。トンパシローは白馬に乗って人間世界にきた。竜王の母親に会って，自分の話に従いなさいといった。もし自分の言うとおりにすれば放してやるが，そうでないと人間がやってきて切ってしまうだろうといった。竜王の母親は恐れて，従うことにした。そして次のものを要求してきた。柏樹を９回背負う（10荷），バター９瓶，米９篭，９個の海，９個の山。トンパシローはその要求をのんだ。人間は放牧できないのでバターがない。われわれ人類ははじめての農耕（刀耕火種）なのに，柏樹を10

荷背負えばその農耕ができず，米を9つの篭いっぱいにすることはできない。そこで，トンパシローは判断した。線香のような柏樹少し，その中にバター（灯り）を少し，3粒の米をあげますと。われわれは竜王の病気を治す責任がある。これから，竜王を泉のわくところで祭ります。それから，竜王の母親は次のことをいった。ダイシ山の柏樹を切ってはいけない，まずは木を切らない，白虎を殺してはいけない，鷹を狩ってはいけない，虎と豹を殺してはいけない，熊と猪を殺してはいけない，岩羊と麝を殺してはいけない，野生の鶏を殺してはいけない，水の中の魚を釣ってはいけない，蛇を殺してはいけない，木を切ってはだめで植えることしかいけない，汚いものを捨てて水を汚してはいけない，山で火をつけてはいけないと。人間は自由に農耕や放牧ができるようになり，もし子供や家畜が繁殖できないとき，竜王の母親から恵みをもらえる。一方竜王が病気になると，われわれが治しにきます。こうして，隠していた帽子と杖をトンパシローに出した。帽子は大きな鳥に渡し，杖はトンパシローが使った。儀礼では，塔をたてて，東南方向に住んでいた竜王を祭る。鬼を弾圧する獅子，大鵬，青竜によって，塔を守っている。獅子は爪のある鬼を，大鵬は飛べる鬼を，青竜（竜王の母親の化身）は角のある鬼を弾圧する。8つの方角から鬼を追い出してから祭りをはじめる。柏樹を燃やして煙を出すのは，竜王にさしあげるためである。竜王の祭りでは動物を一切殺してはいけない。動物を殺さない儀礼はこれしかない。雨が降らないとき，雨乞のために竜王を祭る。村人は竜王を祭るけれども，どうして祭るのかは知らない。

③先祖祭り。これには，清明節（ジュピュー），トッピュー（6月），ツピュー（11月）などがある。先祖がたどっきた歴史を記した経典にも先祖祭り（ユッピュー）について言及している。清明節は「春になって花が咲いた。白鶴もおりました。一番いい季節に祭ります。カッコーもオシドリもあらわれた。そのとき云々」とあり，トッピューは「6月に入ると先祖を祭る。われわれの穀物ができ，お粥を先祖に食べさせます」，11月のツピューは「年猪が太くなりました」とある。子孫は先祖を祭ることで恩を返すのである。中元節には，トンパは関与しない。ナシ族の家族は，祭天と先祖祭りを欠かせない。祭天は村毎にそれぞれやっていた。

④天と先祖の国とは異なるのか。天を祭るのは，父と母（地）を祭ることである。ナシ族の先祖は，青海省からやってきた。ヤク（毛牛）を使って，羊や馬を飼っていたので，人が死ぬと，ヤク，羊，馬（死者の使う馬）の3つの動物を殺して祭る。これらはナシ族の家畜の大切なものなので，人が死ぬと魂に従って動物をさしあげる。死者の超度を行うときは，牛や羊を殺し，馬は紙で作る。女姓は袖口の下に糸を隠しもっているので，鬼にそれをやらないために，羊の胃を糸のようにみせかけて鬼に与えてだます。鬼が羊の胃をナイフで開けているすきに，逃げてしまうのである。だから，ナシ族の超度の儀礼では羊を殺すのである。先祖の国はヤクを飼うところだという。超度の儀礼を行う場所が決まると，息子は馬に乗って墓に死者を迎えにいく。家に連れてくると，儀礼をして再び先祖の国（天ではない）に送る。天を祭る経典（ムピューテグー）によれば，われわれナシ族の祖先は第7代までは天女と結

婚していた。第７代目の時に洪水があって，その息子には４人兄弟の息子があった。長男はシンメー（メーという姓），次男はホー，３男はシュー（われわれはシューの子孫），４男はヨーであった。それぞれ妻の姓が書いてある。長男と次男は長江のほとりに住み始めた。３男と４男は，環境のよい麗江に馬に乗ってやってきた。

⑤風祭り。小さい風祭りは人が病気にかかった時に行い，大きい風祭りは男女が心中した時などにする。大祭も小祭もやり方は同じであるが，小さい祭りはわずかな経典ですませ，大きい祭りでは多くの経典を読むので70～80冊も必要となる。風祭りは経典の中の順番に応じて進行し，まず祭風（風祭り）の場所をトンパに頼んで踊りながら松明（火把）をもって邪悪なものを追い出す。トンパシローの葬式の際には，弟子のトンパが棺の周りで武術を行った。正常死した人は先祖（祖先）の国に送り，自殺などの異常死した人は第三国に送る。死んだ時に米を入れるかどうかで，正常と異常の判断ができ，正常死の場合は米を入れる。第三国には二人の王様がおり，経典ではユンゾズ（女）とコトスィクワ（男）と記してある。二人の王様は，毎日呼んでいる。一回米を作れば何回も食べられ，一回服を作れば何回も着ることができるとてもよいところだと。虎が馬のように乗れるし，竜は牛のように農耕する。山の花は頭に飾り，朝露を水として飲む。山の上に住み，いろいろの鳥の声が聞こえる。二人の王様は，昼となく夜となく，呼んでいる。その魂は，その声を聞いて第三国に行きました。両親が正常死だと一段一段先祖の国に送る。死者の口に米や銀を入れるのはプレゼントである。川を渡ったり，舟に乗る時に切符を買う金になる。川を渡ったあと，糧粉を売っている人がいて，それを食べるのにも金がいる。また祖先へのプレゼントにもする。そこで，男の口には米９粒・茶葉・銀を，女の口には米７粒・茶葉・銀を入れる。また死者の性別に合わせて，女性には衣服・花・櫛はすべて女のものだから送り，男性には楽器を送る。風祭りは，木を伐るときに死亡した人，飛び降りて死亡した人，歩いていて倒れて死亡した人，橋を渡るときに死亡した人，喧嘩をして死亡した人，自然の災害で死亡した人，山の木が倒れて死亡した人，薬を飲んで死亡した人など異常な死を遂げた人の場合にも行う。風祭りの経典には，次のような物語がある。一つは，足の長い男と首の長い女が恋愛する。家人はこれを認めないが，二人は愛しあう。９ケ月１０日結婚して，牛頭の息子を生んだ。生まれた第一日，鶏を食べたが足りない。第２日，豚を食べたが足りない。第３日，牛を食べたが，まだ足りない。これは，人間の子供ではないと村人は殺した。息子の足は天を支えている（逆さ吊りになっている）。そこで，二人は自殺した。今一つは，カメジュミジとツゾユレパという放牧生活している二人の物語で，男は山の動物を犬を使って狩猟する人で弓で首を吊り，女は羊毛で糸を編んでいる人で放牧民の家で自殺した。この二人の物語は厚い経典に記されている。男は自分の黒いヤクを失い，捜している時に妻が自殺しているのに出会った。男は泣いた。そして妻をナシ族独特の背当をかけて火葬した。この二人の物語が風祭りの経典としてもっとも多いという。